

コミュニティ福祉学部
2年 工藤 真由

2泊3日、短い期間ではあったものの、知的障害を持つ人たちと同じ現場で仕事をして、同じご飯を食べて、同じ屋根の下で生活した。そのなかで感じたのは、障害というものが何の障害となるのか、つまり、今まで私がこのワークキャンプに対して抱いていたイメージのすべてが、ある意味では期待はずれだったということである。

まず、あの3日間で、私たちが彼らにしてあげたことは何ひとつなかった。むしろ彼らも最初からそれを望んではいなかった。ほのぼのと作業をし、休憩時間にはたっぷりと体を休める、そしてまた作業をし、ゆっくりと日が沈むのを待つ。一日が楽しく終わる、といった暖かな暮らしなのだろうと思っていた。「〇〇さん、これを一緒にやろうね」と私たちが呼びかける。そして会話となる糸口をこちらが探しあてられたら、いっそうともに行なう作業が楽しくなり、作業そっちのけでおしゃべりに興じたりするんだろう、そう思っていた。

それは、障害者ができる仕事には限度がある、障害者がそんなに仕事ができるはずないといった、何ものでもない、差別をしていたからである。そして差別は優越感を生み、私は「何かしてあげよう」と勝手に思い込んでいた

のである。

ところが、何かしてもらったのは私たちの方で実に『何かされっぱなし』であった。みな、本当に仕事が好きなのである。都会の暮らしに染まっている私たちは、暑さのせいでハードに感じる仕事内容に、休憩はまだかと時計ばかり見ていた。彼らは休憩が来ようがこまいが、自分の担当作業をやりつづける、そして私たちに丁寧に指示を出す。彼らはとても生き生きとした表情をしていた。

おそらく彼らは『生活をする』ということが、いかに妥協の許されないことかを意識的にしろ無意識的にしろわかっている。そしてすべてのことに対しての『意欲』が、私たちとは比べものにならないくらい勝っている。それは仕事に対してであったり、食欲であったりとさまざまであるが、私は何か一生懸命になることはもうずいぶん忘れていた気がする。彼らからたくさんのことを学んだが、それは決して彼らが障害者だからではない。

すべての、弟を持つ人が、弟をかわいいと思っている、または彼が小さいころはかわいかった、と思っているように、私も弟がかわいい。弟は17歳で、生まれたときから脳に傷を持っていた。知的障害児である。そのことについては、一度も不思議に思ったことはない。なぜなら物心がついたときからずっと、それが弟だったからである。けれど、弟本人の持つ性格のなかには、

知的障害をもつゆえの『純粋さ』も多く含まれていて、それは彼が小さいころから私が触れてきた彼自身でもあった。だから、17歳となった今でも変わらずにかわいいと思う。それが社会に出て大人の仲間入りをする一歩手前だということもわかっている。

だから、私は知的障害を持つ人を見るとき、弟のイメージと重ね合わせてしまう。知的障害を持つ人の『幸せ』について考えるときは、守るべき対象としての幸せと重ね合わせて考えてしまう。

しかし、このワークキャンプを通して、自分を見つめなおしたとき、『障害者として』だとか、粹にはめて人の幸せを考えることはできないのではないかと疑問を感じた。

一年半、私がこのコミュニティ福祉学部で勉強するなかで、『知的障害を持つ人たちにとっての幸せとは何か』というのが、自分の中でのひとつの課題となっていた。施設やグループホームなどで生活をする際の実状、職員たちの、自由や個性を無視した指導、劣悪な労働条件、現実の厳しさなどを学び、彼らが社会で自立して生きていくことの困難さを知ったとき、では弟は、かれらはあんなに純粋できれいな心をもっているのに、一生幸せに暮らしてはいけないのだろうか、社会的に肩身の狭い思いをして生きていかなければいけないのだろうか、と思った。

そんなとき、ワークキャンプに同行した福山先生は、私に「あなたは知的

障害者をかawaiiそうだと思います」と言った。そしてワークキャンプの最中、美恵子さんは、「あなたは気負いをしすぎている」と言った。

実際、私は彼らの幸せというものを、常に自分の考える幸せと重ね合わせていたのだ。彼らの生きるかたちを、自分の生きる形に沿わせて考えていたのだ。知的障害を持つ人たちが生きていくには、障害の有無にかかわらず、多くの人々と触れ合うことが大切だと考えている。地域に根ざした、広いコミュニティのなかでの人間関係を築くことが必要である。そうすることで、障害を持っていたとしても、ありのままを受け入れられるということ、私たち健常者に身をもって実感させることができるからである。

現在の日本社会において、障害者を受け入れる意識をひとりひとりが十分持っているとはいえない。けれども障害者が身近にいなければ、そのような意識は決して芽生えないのである。

だから、私がワークキャンプに参加した初日、どんぐり牧場で働くみんなは、11日のうち1日が休みになる以外は、ほぼ毎日この山の上で1日中働き、限られたコミュニティの中のみで生活をしていることを知ったとき、せめて牧場をもっと町のなかに作るべきだったのではないかと、とか町民たちとふれあう機会を設けたら彼らも楽しみが増えるのだろうに、とかもっと休みの日を増やした方がよいのではないかと、などと疑問を抱いた。

しかし、考えていく内に、「知的障害者だからこそ地域と密着したコミュニティを」だとか、「知的障害だからこそあまり拘束するのは」などと語るこそ、まずかれらの人間としての持ち味なり、性格なり、技能なり、またおかれている状況を見無視し、『障害者』というレッテルをはりつけて、ひとくくりの枠に押し込めようとしているほかならないのではないかと思う。まず見るべきは、そのひと『個人』なのである。

確かに、戦後、経済を大いに発展させてきたと言う自信を持つ、今の日本社会は、「能率、効率、成績、業績、生産、発展だけが重視されてしまっている」（『生と死』『安楽死と尊厳死』：神田健次）と言われるように、教育においてもこれらに重点がおかれ、そのような価値観を我々に植えつけてきた。そして、そのような価値観は、みな同じ使命をもち、役割を担うのだという意識を生む。そしてそれらの波についていけない人たち、障害者たちを「かわいそう」だと思ってしまう。

人はみなそれぞれが違った条件をもち、自身を持つ。一般論を抜きにして、みなそれぞれが自分なりの「幸せとは何か」を考えているはずである。それぞれの人生のなかで、仕事がつらかったり、人間関係がうまくいかなかったり、さまざまな問題を抱えている。それが障害者にとっては、差別の目であったり、日常生活への支障であったりする。

大切なのは「障害」という条件のみをピックアップしてあれこれ討論することではなく、「障害」という条件を抱えたひとりの人間としてみていくことではないだろうか。『知的障害者にとっての幸せ』は、我々が答えを出せるものではない。健常者と知的障害者が、生きるかたちという点において、同様である必要はない。ただ、同等であるべきなのである。

我々は、彼ら一人一人の持ち味、性格、技能、状況をふまえた上で、それぞれの幸せとは何かや、生き方というもの理解してあげる必要がある。